

令和 7 年度病害虫発生予察予報第 9 号(令和 7 年 12 月)

令和 7 年 12 月 5 日
高知県病害虫防除所

《予報の概要》

作物名	病害虫名	予想発生量※
促成キュウリ	べと病 菌核病 うどんこ病 黄化えそ病 退緑黄化病 ミナミキイロアザミウマ タバココナジラミ ハスモンヨトウ	<u>やや多(中西)</u> 、平年並(中央)、やや少(西) やや少(県下全域) 平年並(中西)、少(中央、西) <u>多(中央、中西)</u> 、やや少(西) <u>多(中央、中西)</u> 、少(西) <u>やや多(中西)</u> 、やや少(中央、西) <u>やや多(中西)</u> 、平年並(西)、やや少(中央) <u>やや多(西)</u> 、やや少(中西)、少(中央)
促成ナス	うどんこ病 黒枯病 すすかび病 ミナミキイロアザミウマ タバココナジラミ ハスモンヨトウ	やや少(中央)、少(東、西) <u>多(西)</u> 、やや少(東、中央) やや少(県下全域) 少(県下全域) <u>やや多(中央、西)</u> 、少(東) <u>やや多(東、中央)</u> 、少(西)
促成ピーマン ・シシトウ	うどんこ病 斑点病 黒枯病 ミナミキイロアザミウマ タバココナジラミ ハスモンヨトウ	<u>多(中西)</u> 、平年並(中央)、やや少(東) <u>多(東)</u> 、やや少(中央、中西) <u>多(中西)</u> 、平年並(中央)、やや少(東) やや少(中央)、少(東、中西) 平年並(東)、やや少(中央)、少(中西) <u>やや多(中西)</u> 、平年並(中央)、少(東)
促成トマト	黄化葉巻病 タバココナジラミ ハスモンヨトウ	<u>多(中央)</u> <u>やや多(中央)</u> 少(中央)

※ ()内の表記 東：県東部、中央：県中央部、中西：県中西部、西：県西部

県東部：安芸市、室戸市および安芸郡の町村

県中央部：高知市、南国市、香美市、香南市、長岡郡・土佐郡の町村、
吾川郡いの町および高岡郡日高村

県中西部：土佐市、須崎市、高岡郡(日高村を除く)町村および吾川郡仁淀川町

県西部：四万十市、宿毛市、土佐清水市および幡多郡の町村

なお、野菜は「土佐市」を中心部に入れています。

I 気象予報(高松地方気象台12月5日発表)

12月6日から1月5日までの天候見通し

＜予想される向こう1か月の天候＞

向こう1か月の気温は、寒気の影響を受けにくいため、平年並か高いでしょう。高気圧に覆われやすい時期があるため、向こう1か月の降水量は平年並か少なく、日照時間は多いでしょう。平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の気温は高いまたは平年並の確率ともに40%です。降水量は、平年並か少ない確率ともに40%です。日照時間は、多い確率50%です。

週別の気温は、1週目は高い確率50%です。2週目は平年並の確率50%です。3～4週目は平年並の確率40%です

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)＞

期間	対象地域	要素	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
1か月	四国地方	気温	20	40	40
		降水量	40	40	20
		日照時間	20	30	50

＜気温経過の各階級の確率(%)＞

期間	対象地域	低い	平年並	高い
1週目	四国地方	10	40	50
2週目		20	50	30
3～4週目		30	40	30

＜予報の対象期間＞

1か月：12月6日(土)～1月5日(月)

1週目：12月6日(土)～12月12日(金)

2週目：12月13日(土)～12月19日(金)

3～4週目：12月20日(土)～1月2日(金)

II 病害虫発生予想

1 促成キュウリの病害虫

1) べと病

予想 発生量：やや多(中西部)、平年並(中央部)、やや少(西部)

根拠

(1) 11月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は中西部で平年よりやや多く、中央部で平年並、西部でやや少なかった。発病程度は西部で平年よりも高く、中央部、中西部で平年並であった。

(2) 例年、12月は中央部、中西部で発生が増加し、西部では11月と同程度の発生が見られる。

(3) 本病は20°C前後、多湿条件下で発病が多くなる。12月の気温は平年並または高く、降水量は平年並または少ないと予想されていることや、発生状況から現在の発生傾向が続くと考えられる。

対 策

(1) 多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底するとともに、換気や加温によるハウス内湿度の低下に努める。

2) 菌核病

予 想 発生量：やや少（県下全域）

根 拠

(1) 11月の調査では、西部で発生が見られ、発生面積は平年より少なく、発病程度は平年並であった。

(2) 本病は中央部、西部で11月以降、中西部で12月以降に発生する傾向があるため、発生が増加すると考えられる。

対 策

(1) 発病果実や茎葉は菌核を形成する前に除去し、次作の伝染源を少なくするとともに、換気や加温によるハウス内湿度の低下に努める。

(2) 発病履歴のあるほ場では、7日間隔で数回予防散布を行う。

3) うどんこ病

予 想 発生量：平年並（中西部）、少（中央部、西部）

根 拠

(1) 11月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は中西部で平年並、中央部、西部で少なかった。発病程度は西部で平年よりやや高く、中央部、中西部で平年以下であった。

(2) 例年、12月はいずれの地域でも11月と同程度の発生が見られる傾向にある。

(3) 12月の気温は12月の気温は平年並または高く、降水量は平年並または少ないと予想されていることや、発生状況からいずれの地域でも現在の発生が続くと考えられる。

対 策

(1) 他の糸状菌病害とは異なり、やや乾燥条件で発生が多くなる。多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。薬剤によっては、散布後も病斑の見た目が変化せず防除効果がわかりづらい場合があるため、防除後に展開した葉の発病の有無で防除効果を判断する。

4) 黄化えそ病

予 想 発生量：多（中央部、中西部）、やや少（西部）

根 拠

(1) 11月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は中央部、中西部で平年よりやや多く、西部で少なかった。発病程度は中西部で平年並、中央部、西部で低かった。

(2) 例年、いずれの地域も12月には既感染株の発病が続き、発生が増加する傾向にある。

(3) 12月の気温は12月の気温は平年並または高いと予想されていることや、発生状況

から、発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 媒介虫であるミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。また、罹病株は早期に除去し、埋却するなどの処分を行う。

5) 退緑黄化病

予 想 発生量：多(中央部、中西部)、少(西部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、中央部、中西部で発生が見られ、両地域とも発生面積は平年より多く、発生程度は高かった。
- (2) 例年、中央部では12月には既感染株の発病が続き、発生が増加する傾向にある。中西部、西部ではわずかに発生がみられる程度である。
- (3) 12月の気温は平年並または高いと予想されていることや、発生状況から、中央部では発生が増加し、中西部、西部では現在の発生が続くと考えられる。

対 策

- (1) 媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底する。

6) ミナミキイロアザミウマ

予 想 発生量：やや多(中西部)、やや少(中央部、西部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、中西部で発生が見られ、発生面積、発生程度ともに平年並であった。
- (2) 例年、12月はいずれの地域も発生が増加する傾向にあり、中西部では現在より発生が増加し、中央部、西部でも発生が見られ始めると考えられる。

対 策

- (1) 多発すると防除が困難になるため、低密度時の防除を徹底する。薬剤防除の際は、かけ残しのないようていねいに散布し、特に上位葉は重点的に実施する。また、薬剤抵抗性が発達しているため、開口部のネット被覆(0.4mm目以下)や天敵の利用など、化学合成農薬以外の防除方法も取り入れる。

7) タバココナジラミ

予 想 発生量：やや多(中西部)、平年並(西部)、やや少(中央部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は中西部で平年よりも多く、中央部、西部では平年並であった。発生程度はいずれの地域も平年以下であった。
- (2) 例年、12月は中央部、中西部では気温の低下とともに減少し、西部では11月と同程度の発生が続く傾向にあり、中央部、中西部では減少し、西部では現在の発生が続くと考えられる。

対 策

- (1) 本虫は上位展開葉に産卵するので、薬剤防除の際は、かけ残しのないようていねいに散布し、特に上位葉は重点的に実施する。また、薬剤抵抗性が発達しているため、開口部のネット被覆(0.4mm目以下)や天敵の利用など、化学合成農薬以外の防除方法も取り入れる。

8) ハスモンヨトウ

予 想 発生量：やや多（西部）、やや少（中西部）、少（中央部）

根 抱

- (1) 11月の調査では、中西部、西部で発生がみられた。発生面積は西部で平年よりも多く、中西部で平年並であった。発生程度は西部で平年よりも高く、中西部で平年並であった。
- (2) 県内4地点に設置したフェロモントラップにおける11月の誘殺数は、いずれの地域も平年以下であった。
- (3) 例年、12月はいずれの地域も気温の低下とともに減少する傾向にあることや、発生状況から、野外からのハウス内への飛び込みがなくなり、発生は減少すると考えられる。

対 策

- (1) 卵塊や幼虫は見つけ次第除去、捕殺する。なお、卵塊は植物体だけではなく防虫ネット等にも産み付けられるので注意する。
- (2) 老齢幼虫になると食害量が多くなるとともに薬剤の防除効果が低下するため、若齢期の防除に努める。また、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統の薬剤の連用を避ける。
- (3) 施設栽培では、交信かく乱剤（合成フェロモン剤）の利用も有効である。

2 促成ナスの病害虫

1) うどんこ病

予 想 発生量：やや少（中央部）、少（東部、西部）

根 抱

- (1) 11月の調査では、東部と中央部で発生が見られた。発生面積は中央部で平年よりやや少なく、東部で少なかった。発病程度は中央部で平年より高く、東部で低かった。
- (2) 例年、12月はいずれの地域でも発生が減少する傾向にある。
- (3) 12月の気温は平年並または高く、降水量は平年並か少ないと予想されていることや、発生状況からいずれの地域でも現在の発生が続くと考えられる。

対 策

- (1) 他の糸状菌病害とは異なり、やや乾燥条件で発病が多くなる。多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。

2) 黒枯病

予 想 発生量：多（西部）、やや少（東部、中央部）

根 抱

- (1) 11月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は西部で平年よりも多く、東部、中央部では少なかった。発病程度は西部で平年よりも高く、東部、中央部では低かった。
- (2) 例年、12月はいずれの地域も発生が増加する傾向にある。
- (3) 12月の気温は平年並または高いと予想されていることや、例年の発生状況からいずれの地域でも発生は増加傾向で推移すると考えられる。

対 策

- (1) 多発すると防除が困難になるので発生初期の防除を徹底するとともに、換気や加温により、ハウス内湿度の低下に努める。
- (2) 発病葉は早めに除去し、ほ場外に持ち出して処分する。

3) すすかび病

予 想 発生量：やや少（県下全域）

根 拠

- (1) 11月の調査では発生は確認されなかった。
- (2) 例年、12月はいずれの地域も発生が増加する傾向にある。
- (3) 12月の気温は平年並または高いと予想されていることや、例年の発生状況からいざれの地域でも発生は増加傾向で推移すると考えられる。

対 策

- (1) 多発すると防除が困難になるので発生初期の防除を徹底するとともに、換気や加温により、ハウス内湿度の低下に努める。
- (2) 発病葉は早めに除去し、ほ場外に持ち出して処分する。

4) ミナミキイロアザミウマ

予 想 発生量：少（県下全域）

根 拠

- (1) 11月の調査では、中央部で発生が見られたが、平年と比べ発生面積は少なく、発生程度は低かった。
- (2) 例年、12月は気温の低下やタバコカスミカメなどの天敵の増加に伴い、いずれの地域も発生が減少する傾向にあることから、いざれの地域でも発生は減少傾向で推移すると考えられる。

対 策

- (1) 多発すると防除が困難になるため、低密度時の防除を徹底する。
- (2) 天敵の定着が遅れているほ場では追加放飼を検討する。

5) タバココナジラミ

予 想 発生量：やや多（中央部、西部）、少（東部）

根 拠

- (1) 11月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は中央部と西部で平年よりも多く、東部でやや少なかった。発生程度は中央部で平年より高く、東部、西部で低かった。
- (2) 例年、12月は気温の低下やタバコカスミカメなどの天敵の増加に伴い、いずれの地域も発生が減少する傾向にあることから、いざれの地域でも発生は減少傾向で推移すると考えられる。

対 策

- (1) 本虫は主に上位展開葉に産卵するので、薬剤防除は上位葉を中心に実施する。
- (2) 天敵の定着が遅れているほ場では追加放飼を検討する。

6) ハスモンヨトウ

予 想 発生量：やや多（東部、中央部）、少（西部）

根 拠

- (1) 11月の調査では、東部、中央部で発生がみられた。発生面積は両地域とも平年より多く、発生程度は中央部で平年より高く、東部で低かった。
- (2) 県内4地点に設置したフェロモントラップにおける11月の誘殺数は、いずれの地域も平年以下であった。
- (3) 例年、12月は東部、中央部では気温の低下とともに減少し、西部ではやや増加するものの少程度の発生にとどまることや、発生状況から、野外からのハウス内への飛び込みがなくなり、発生は減少すると考えられる。

対 策

- (1) 卵塊や幼虫は見つけ次第除去、捕殺する。なお、卵塊は植物体だけではなく防虫ネット等にも産み付けられるので注意する。
- (2) 老齢幼虫になると食害量が多くなるとともに薬剤の防除効果が低下するため、若齢期の防除に努める。また、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統の薬剤の連用を避ける。
- (3) 施設栽培では、交信かく乱剤(合成フェロモン剤)の利用も有効である。

3 促成ピーマン、シシトウの病害虫

1) うどんこ病

予 想 発生量：多(中西部)、平年並(中央部)、やや少(東部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は中西部で平年より多く、中央部でやや少なく、東部で少なかった。発病程度はいずれの地域も平年より低かった。
- (2) 例年、12月はいずれの地域でも発生が増加する傾向にある。
- (3) 12月の気温は平年並または高く、降水量は平年並か少ないと予想されていることや、発生状況からいずれの地域でも発生は増加傾向で推移すると考えられる。

対 策

- (1) 他の糸状菌病害とは異なり、やや乾燥条件で発病が多くなる。多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。
- (2) 発病葉は早めに除去し、ほ場外に持ち出して処分する。

2) 斑点病

予 想 発生量：多(東部)、やや少(中央部、中西部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は東部で平年よりも多く、中央部、中西部で少なかった。発病程度はいずれの地域も平年より低かった。
- (2) 例年、12月はいずれの地域でも発生が増加する傾向にある。
- (3) 12月の気温は平年並または高いと予想されていることや、例年の発生状況からいずれの地域も発生が増加すると考えられる。

対 策

- (1) 多発すると防除が困難になるので発生初期の防除を徹底するとともに、換気や加温によりハウス内湿度の低下に努める。
- (2) 発病葉は早めに除去し、ほ場外に持ち出して処分する。

3) 黒枯病

予 想 発生量：多(中西部)、平年並(中央部)、やや少(東部)

根 抱

- (1) 11月の調査では、中央部と中西部で発生が見られ、発生面積は中西部で平年よりやや多く、中央部で平年並であった。発病程度は、両地域とも平年より高かった。
- (2) 例年、12月は東部、中西部では発生が増加し、中央部では11月と同程度の発生が続く傾向にある。
- (3) 12月の気温は平年並または高いと予想されていることや、例年の発生状況から東部、中西部では発生が増加し、中央部では現在の状況が続くと考えられる。

対 策

- (1) 多発すると防除が困難になるので発生初期の防除を徹底するとともに、換気や加温により、ハウス内湿度の低下に努める。
- (2) 発病葉は早めに除去し、ほ場外に持ち出して処分する。

4) ミナミキイロアザミウマ

予 想 発生量：やや少(中央部)、少(東部、中西部)

根 抱

- (1) 11月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は中央部で平年並、東部、中西部で平年より少なかった。発生程度は、中西部で平年よりも高く、東部、中央部で平年より低かった。
- (2) 例年、12月は気温の低下やタバコカスミカメなどの天敵の増加に伴い、いずれの地域も発生が減少する傾向にあることから、いずれの地域でも発生は減少傾向で推移すると考えられる。

対 策

- (1) 多発すると防除が困難になるため、低密度時の防除を徹底する。
- (2) 天敵の定着が遅れているほ場では追加放飼を検討する。

5) タバココナジラミ

予 想 発生量：平年並(東部)、やや少(中央部)、少(中西部)

根 抱

- (1) 11月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は東部で平年よりやや多く、中央部で平年並、中西部で少なかった。発生程度は、中西部で平年よりも高く、東部でやや高く、中央部で低かった。
- (2) 例年、12月は気温の低下やタバコカスミカメなどの天敵の増加に伴い、いずれの地域も発生が減少する傾向にあることから、いずれの地域でも発生は減少傾向で推移すると考えられる。

対 策

- (1) 本虫は主に上位展開葉に産卵するので、薬剤防除は上位葉を中心に実施する。
- (2) 天敵の定着が遅れているほ場では追加放飼を検討する。

6) ハスモンヨトウ

予 想 発生量：やや多(中西部)、平年並(中央部)、少(東部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、中央部、中西部で発生がみられた。発生面積は中西部で多く、中央部でやや多かった。発生程度は中西部で高く、中央部で低かった。
- (2) 例年、12月はいずれの地域も気温の低下とともに発生が減少する傾向にある。
- (3) 県内4地点に設置したフェロモントラップにおける11月の誘殺数は、いずれの地域も平年以下であった。
- (4) 例年、12月はいずれの地域も気温の低下とともに発生が減少する傾向にあることや、発生状況から、野外からのハウス内への飛び込みがなくなり、発生は減少すると考えられる。

対 策

- (1) 卵塊や幼虫は見つけ次第除去、捕殺する。なお、卵塊は植物体だけではなく防虫ネット等にも産み付けられるので注意する。
- (2) 老齢幼虫になると食害量が多くなるとともに薬剤の防除効果が低下するため、若齢期の防除に努める。また、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統の薬剤の連用を避ける。
- (3) 施設栽培では、交信かく乱剤(合成フェロモン剤)の利用も有効である。

4 促成トマトの病害虫

1) 黄化葉巻病

予 想 発生量：多(中央部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、発生面積は平年よりも多く、発生程度は平年よりも高かった。
- (2) 例年、いずれの地域も12月には既感染株の発病が続き、発生がやや増加する傾向にある。
- (3) 12月の気温は平年並または高いと予想されていることや発生状況から、発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底する。また、罹病株は場外に持ち出し、埋却するなどして処分する。

2) タバココナジラミ

予 想 発生量：やや多(中央部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、発生面積は平年よりも多く、発生程度は平年よりも高かった。
- (2) 例年、12月は気温の低下に伴い、いずれの地域も発生が減少する傾向にあることから、発生は減少傾向で推移すると考えられる。

対 策

- (1) 本虫は主に上位展開葉に産卵するので、薬剤防除は上位葉を中心に実施する。また、天敵の利用など、化学合成農薬以外の防除方法も取り入れる。

3) ハスモンヨトウ

予 想 発生量：少(中央部)

根 拠

- (1) 11月の調査では、発生は確認されなかった。
- (2) 県内4地点に設置したフェロモントラップにおける11月の誘殺数は、いずれの地域も平年以下であった。
- (3) 例年、12月は気温の低下とともに発生が減少する傾向にあることから、野外からのハウス内への飛び込みがなくなり、発生は減少すると考えられる。

対 策

- (1) 卵塊や幼虫は見つけ次第除去、捕殺する。なお、卵塊は植物体だけではなく防虫ネット等にも産み付けられるので注意する。
- (2) 老齢幼虫になると食害量が多くなるとともに薬剤の防除効果が低下するため、若齢期の防除に努める。また、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統の薬剤の連用を避ける。
- (3) 施設栽培では、交信かく乱剤(合成フェロモン剤)の利用も有効である。

農作物の病害虫防除のための情報です。お気軽にご利用ください。

病害虫防除所ホームページ(こうち農業ネット)<https://www.nogyo.tosa.pref.kochi.lg.jp/?sid=2016>

- ①病害虫発生予察月報、病害虫発生予察予報
- ②病害虫発生予察注意報、病害虫発生予察警報、病害虫発生予察特殊報
- ③病害虫発生予察技術資料
- ④新しく問題となっている病害虫 etc.

高知県農薬情報システム <https://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/haishinfile/list/kochi>

- ①農薬の検索
- ②農薬データの一覧
- ③配信ファイルの閲覧(農薬安全使用、病害虫防除指針 etc.)